

草庵仏教

第216号
(発行日)

2008年6月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月2日と

12日。午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

へつらいの煩惱

宗祖親鸞聖人は「へつらう心」を何度も著作の中に取り上げておられるが、私たちはそれほど「こびへつらう」心が罪深いとは感じていないのではなからうか。しかしこの心は、この世の悪が一向に減らない一つの要因であると思

う。「へつらい」は人間関係の中では、相手から認められたい、きらわれたくない、損をせず得をしたいために、こびへつらうのであり、貪欲の煩惱に結びついている。しかしこの心はあまりにも日常化していて気がつきにくい。あう人に顔を和らげニコニコしたり、やさしい言葉をかける中にも相手に対するへつらい心がある。

この「こびへつらい」は個人の人間関係だけでなく、それが時には社会問題にまで表面化し、あるいは世界の政治体制の中でも表れてくる。

近年、食品の偽装事件がと

きどき起こっている。名産ブランドの「〇〇産」と銘打つてあるが、実際の中味は他の普通の地域産のものであるとか、売れ残った商品を製造年月日を変えて再販したり、お客にいったん出した料理の残り物を再度使うなどもあった。

こういう報道で、レポーターがそこに勤めて偽装とか不正とかに関わった社員に「なぜそんなことをしたのか」と問うと、「上司の命令で」とか「社長の命令で」という答えがしばしば返ってくる。こういう返答をTVなどで聞いた時は腹が立つが、しかし、もし自分が従業員の一人としてその会社で働いているとすると、社長からやましい仕事を命じられたとき、それを断ったり、内部告発をするかというとき、絶対にしませんというとき、絶対にはやましいものがある。もし、断ったり、内部告発をするとき、会社をクビになるなり、いやがらせにあうなり、あるいは左遷されるなどの処置が待っているであろう。そうすると収入が激減し家族を養

生活基盤が脅かされる可能性が当然あるから、やましいことを拒絶したり、告発するなりすることはかなりの覚悟がなくてはできないであろう。

誰も上司や権力者にへつらいたくはないであろうが、自分や家族の生活の安定や財産や地位やなどを守ろうとして、こびへつらうのである。

例のニューヨークでの九・

一一事件があった後、テロの撲滅を掲げてブッシュ大統領がアフガニスタンへの進攻を決めた。あの時、アメリカのマスコミではそれを批判する言論は殆どでなかった。批判する知識人は当然いたと思うが、あの時、批判意見を公にすると、周囲からバッシングにあうことを恐れているかのようだった。実際、あるアメリカ女性の活動家でテロ報復への批判をした人がいたが、周囲から激しいバッシングを浴びたという。ブッシュのテロ報復政策に一斉に賛同しているかのようなマスコミの姿は、正しいと思っても世の中の態勢や風潮に抵抗することは、抵抗する本人なりグループなりがつぶされる危険性があるから、それを怖れてのこ

とであろう。これはやはり世間や権力へのこびへつらいであるといえよう。

不正を暴いたり、告発したり、やましいことに荷担するのを断ったりするなどのいわゆる正義を行うと、みんなから歓迎されたり、ほめてくれたりする世の中かというとき、そうではない。かえって周囲から非難されたり、追放されたり、経済的な困窮に落とされたりして、苦しみに堪えていかねばならないことが多い。そういう世界のことを娑婆という。娑婆とは堪忍土という意味で、正しい生き方をしようとするとき苦しみに遭わねばならないような世界という意味である。

自分と家族の安全、財産や地位などを守ろうとする欲愛の心からへつらいとか迎合が起ころのである。

こうしたへつらいの煩惱が根深いことを身に浸みて感じるが、この煩惱がいかに世の中を濁しているであろうか。しかもそれを私たちは悲痛することも薄い。こういうへつらいの罪を宗祖は厳しく自他の上に見ておられるのである。

正信偈に学ぶ問答

(五)

法蔵菩薩因位時

在世自在王仏所

親見諸仏浄土因

国土人天之善悪

建立無上殊勝願

超発希有大弘誓

(正信偈書き下し)

法蔵菩薩の因位の時、世自在王仏の所にましまして、諸仏の浄土の因、国土人天の善悪を親見して、無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超発せり。

(現代語訳)

法蔵菩薩の因位のとときに、世自在王仏のみもとで、仏がたの浄土の成り立ちや、その国土や人間や神々の善し悪しをご覧になって、この上なくすぐれた願をおたてになり、世にもまれな大いなる誓いをおこされた。

*

A 「無量寿経には、世自在王仏はかすかぎりないほどの仏の浄土やその浄土の人間や神々の有様を説かれ、それを聞いて法蔵菩薩はそれらの善し

説き、法蔵菩薩は世自在王仏の説法を見るが如くにお聞きになったということではないでしょうか

悪しを見られたと説かれていますが、なぜそれらを見る必要があったのですか

A 「法蔵菩薩はそれらの浄土のすがたを見て、どうなさったのですか

D 「法蔵菩薩は一切衆生を救いたい、仏にしたいという広大な願いを起こされ、その願

D 「かずかぎりもないほどの浄土の成り立ちの因とそれらの浄土にいるものたち(いわゆる正報、人や神々など)の善し悪しのすがたを見て、その中から、ご自分のしあげる

いを実現するために、浄土を完成し、その浄土に一切衆生

浄土はかくありたいと、善いものを選び、悪いものを捨て

を迎え入れて仏にしようと思

て、この上ない浄土を構想し、

浄土はどのような功德のある

浄土に生まれたものをしてこ

者ほどのような徳を得るもの

の上ない功德あるものたらし

たらしめようか、またその浄

める、そういう浄土を完成さ

土にはどのように生まれしめ

せる行(因)を選択し、その

ようかなどを思惟するため、

浄土に一切衆生を生まれしめ

世自在王仏にあらゆる仏の浄

る道を選び取られたのであり

土がどのような世界であり、

ましよう

どのような世界で生まれたい

A 「法蔵菩薩はさまざまに仏

のか、またそこに生まれてい

の国を見て、その善いところ

るものすがたはどのようなで

勝れた点を選び取り、悪いと

あるのかを広く知りたいと願

ころや劣った点を選び捨て

われたためでしょう

て、この上ない浄土を完成し

ようとされたのですね

D 「ええそうです。ごく卑近

A 「法蔵菩薩はそれらを(見

なたとえで云えば、国家建設

られた」というのはどうい

のはじめ自分たちの国をどう

時に、さまざまな国を視察し

ったのですか

て、その国の状態や国民の品

D 「いいえ、法蔵菩薩は迷

性や状況など、またどのよう

の世界、私たちの穢土を見

にしてそういう国が出来たの

れて、そこで生死愛憎に苦し

かなどを見て回り、他の国々

で、救うてまことの浄土に生

の良い点を選択し、劣った点

まれしめようとされたので

は捨て、自分の国はこうあり

から、当然私たちの穢土を

たいと理想的な国のモデルを

察されたのであります

作り上げるようなものです。

A 「ではなぜ、諸仏の浄土

話は少し変わりますが、ブー

かりを見られたように説かれ

タンという国がインドの東北

ているのですか

部にあります。その国の大臣

D 「諸仏の浄土ばかりを見

が、(自分たちの国は先進諸

が、さまざまな浄土を見る中

国のいいところは取り入れる

に穢土を見ておられるので

が悪い点は見習わないように

す。実は穢土とか迷いの世界

して国造りをしている」と云

とかは本来はなく、全て清浄

っています。例えば急激な経

な光明の世界いわゆる浄土な

済発展は望まず、自然を破壊

のだと經典(華嚴経・維摩経

するような森林の伐採や道路

など)には説かれています。

は小さな規模の物にするな

です。ですからこの娑婆も本来は、

ど、そういう選択をして国作

りを進めているようです。そ

のように、どういふ仏国にす

るかを法蔵菩薩はさまざまに

仏国を見、善い点ばかりを取

りいれてこの上なき功德圓滿

な仏国を成就しようとされた

のです

A 「法蔵菩薩は、ただ仏国の

D 「ええ、私たちは本来浄土

みを見られて、穢土という迷

にありながら、無明煩惱を起

いの境界や苦しみの世界な

こし、業(行為)を起こして、

ど、濁悪の領域は見られなか

雑記帳

それによって穢土を虚構して

いると云われています」

A 「穢土を虚構しているとは」

D 「土とは領域とか次元とかいう意味です。ですから浄土とは清らかな真実ありのままの領域といわれています。そういう中に私たちはありながら、ありのままの清浄な領域を知らず、無明によって、自己中心的な想念に基づいて世界を感じています。たとえばまわりの人を見る場合でも、好き嫌いの感情や都合の良し悪しや利害損得で、あの人はいい人だとかつまらぬ人だなどと評価して見えています。一本の花を見ても花そのものを見るのではなく、好きな色だとかそうでないとか、花が大きいとか小さいとか、この花は高価だとか安いとか、さまざまな比較や自分の好悪の感情を交えて見えています。そのように私たちは我執や我愛の意識を離れられませんから、自己中心的な意識で物や人を見ているのです。一人一人が感じている世界はその人のかたよった価値判断を中心にして私たちの意識が捉えた世界、いわば自らの我執によって色づけした世界をあたかも真の現実のように思っ

活しているのです」

A 「私たちはめいめいもちの業で虚構している中で生活しているということですが、それでも人間同士は話を通じたり、似たような行動をするのはなぜですか」

D 「それは（お互い人間である）という基本が共通（共業）しているからです。それぞれ個性はありましても同じ人間としての共通した意識をもっているからです」

A 「私たちは無明煩惱によって、それぞれの受け取った世界に生きていて、その中で善悪さまざまな行いをして悲喜苦楽しているのが穢土なのですね」

D 「そういえましよう」

A 「法蔵菩薩は、浄土にありながら穢土を虚構して、その中で苦しみ悩んでいる衆生のすがたを見られたのですね」

D 「そう聞いています。こうした衆生の苦しみを見て大悲を起こし、衆生を助けるためにどういう浄土を仕上げ、その浄土に衆生をどのようにして至らしめるのかを、さまざまに仏国とその成り立ちを見ることがよって思惟されたのでありましよう」（了）

う者のことである。キリスト教徒ならキリストの教えに順うのであろう。

では死んだらどうなるか、という問いにたいして、仏陀釈尊はどう教えられたか。これに対して、ある人々は仏陀は沈黙をされて何も仰らなかつたということを強調される。たしかに仏陀は「世間は常住であるか、それとも無常であるか」「世間は有辺であるか、無辺であるか」「如来は死後は有であるか、無であるか」などという問いに対して沈黙された。しかしそれは、こうした問いは自分自身の解脱やさとり

の問題を離れた形而上学的な問い、いわば議論のための議論であって、それに答えても更なる論義を巻き起こすだけで差し迫った解脱の道から離れてしまふから沈黙をされたと云われている。

だから、原始経典（サンニユッタ・ニカーヤ）によると、ある釈迦族の在家の信者であったマハーナーマンという人が、自分自身の死後に恐れをもつていて、それを釈尊に「私は死んだらどうなるのでしょうか」と問うている。そういう自己一身の苦しみより起こす問いにたいしては釈尊は沈黙されず、次のように答えておられる。

「マハーナーマンよ、恐れることなかれ、汝の死は悪からず、汝の臨終は悪くはないであろう。長い間信仰し、戒め・学問・捨離を修したその人の心は上方におもむき、すぐれたところへゆくであろう」と答えておられる。であれば釈尊は死後を不安に思い、悩んでいる私たちに「死んだらどうなるか、分らない。そんなことは考えないでよい」などと仰っていないのである。

こういう問いに対して浄土の教えでは、仏陀釈尊は「あなたには阿弥陀様ががついておられて、必ず浄土に生まれさせると誓って南無阿弥陀仏となつて喚びかけておられる。大悲の阿弥陀仏の誓いを信じて浄土に生まれなさい」とお勧め下さっている。

人間の物質は物質であり、心も脳という物質の働きから起こるものであるから、死んだら身体も動かず、脳の働きも止まり、心も死滅するというのは唯物論に自然に従っているのである。

確かに愚かな凡夫である私は「死んだらどうなるか分らない」としか言えないが、分らないと云って自分の行く末を「どうにでもなれ」とほっておくことは出来ない。一週間の旅行でも私たちは十分に準備して、何時の特急列車に乗って、何時頃にどのホテルに泊まるなどと細かく決めるし、それでこそ安心した旅行が出来る。

にも関わらず、この世を離れてどこにいくのかという未来行く末の旅に対して、何の準備も用意も全くなしに、「なるようになる」とほったらかすのはあまりにも不用意でなかるうか。分らないければ分かつたお方の権威を認め、それに順って安心して道を歩む。そういう道があるのである。

人間死んだらどうなるかという問いに対して、「分らない」というのが私たちの本音であろう。にも関わらず、「死んだら何もなくなる。無になる」というのは独断である。なぜなら、死は外から観察する外はなく、外から見えているのは肉体が動かなくなった状態しか分らないからである。それしか見えないからである。しかるに心は生きていく間見え見えなのだから、肉体が動かなくなつて肉体を焼いたか

らと云って見えるわけではないのである。だから肉体が動かなくなったからといって心がなくなるとは誰も断定できない。それゆえ、私たち凡夫は「死んだらどうなるのか、肉体は骨と灰になるだろうが、心はどうなるのかそれは分らない」としかいえない。では「死んだらどうなるか、分らない」ということで、分からないままにほっておくか、それとも、生と死の本質を悟った仏（あるいは他の聖賢）の権威を認めて仏の教えに順うか、そこに違いがある。

仏教徒であるということは、「私は死んだらどうなるのですか」を、あてにならない自分の判断やこの世の学者とか思想家とかの説に従うのではなくて、正覚を完成された仏陀の教えに順

信心夜話

《松並松五郎念仏語録を読む》四

太字は松並さんの言葉。

*

○仏様の邪魔をせぬ事とは、仏様の頼みを聞いてあげること。口で念仏申すこと、聞くことである。南無阿弥陀仏

(我に助けさせてくれよ、とまで仰せ下さる仏様の頼みを聞いてあげること。念仏申すことも、念仏を聞くことも、阿弥陀様のお頼みであり、それに従うこと)

○判ったお方に連れられたらそれよいでしょう。

(自分が分かって、納得してと、先頭に立とうとするから、いつまでも道がつかぬ。分かったお方についていけばいい。お釈迦様、法然様、親鸞様のあとについていけばいい。そのままが阿弥陀様に引張られ、連れられていくことになる)

*

○飛鳥川の橋の上から見下ろすと、小魚が水たまりで、嬉しそうに泳ぎ遊んでいる。今の間に「ヒボシ」になるとも知らず。念仏庵の軒下に、蜘蛛が巣

を造って真中に座っている。何時風が吹いて、身も家も吹き散ってしまおうとも知らず。

私、蜘蛛の如く、私、小魚ではあるまいか。かかる身を本となし給いて、南無阿弥陀仏に成りまします尊さ、あにたのもしきにあらずや。

(今にも死ぬいのちであり、危ないいのちであるにもかかわらず、そうとも知らず遊んでいる私たち。そんな私たちに、危ないいのちであり無常のいのちであるぞと、阿弥陀様の方が心配なさって南無阿弥陀仏に成って、喚び続けて下さる)

*

○元祖上人の時代は、自力聖道の盛んな時代なれば、行々相対で「念仏せよ助けられる」と念仏易行を高調された。即ち、「火鉢を持って来い」と言えば火は付いている(行には信は付きもの)。

然るに時がたつにつれ、元祖上人の御心をくみとれず、念仏申していたら極楽行きは当たりまえと、聞き間違いするから、したから、宗祖様は「信心」を強調された。

「火を持って来い」と言えば、火鉢は付きものである(信には行は付きもの)。然し、それも後には「信」にこだわったから、中祖上人い出たま「弥陀をたのめ」と仰せられた。

「弥陀をたのめ」とは、「ヨリカカ

リヨリタノム」。たのむとは「お前の後生はこの弥陀がたのまれてやるであつたよりにせよや」とのお心であります。それが南無阿弥陀仏であります。

南無阿弥陀仏

(法然聖人は「称えるばかりでタスケル」という称名の本願を親しくお説きになった。ところが「念仏しさえすれば助けてくださる」と、聞き間違いする人が多く出た。そこで、宗祖聖人は「タスケルで念仏もうせの大悲の誓いを信ぜよ」と信心を強調された。そうするとまた「何とか信じなければならぬ」と信心を自分の計らいで仕上げにかかる者が多く出てきたので、蓮如上人は「信じるとは難しいことではない。〈我によりかかれ、あてたよりにせよ〉と仰せ下さる弥陀をたのむばかりである」と「弥陀をたのめ」と仰せられた。〈弥陀をたのめ〉とは、〈まるまるたのまれてやるから心配するな〉の弥陀の大悲心そのもの)

*

○隣から牡丹餅もらつて、この小豆はどこで取れた、この砂糖はどこでと、いつまでもせんさくをしていると、頂いた餅が固くなってしまふから、牡丹餅たべながら、生産地を聞いても、おそくはないでしょう。念仏はなれて理に走れば、もの知りになるだけでしょう。称えながら御いわれを聞くのです。

(聞法というのは今称える今の念仏のいわれを聞く。念仏もうさずに念仏のいわれを聞いても、物知りになるだけ。概念化した念仏は固くなった餅の如く死に体である。称えながら今のナマの念仏のいわれを聞けと)

*

○ある青年曰く「お念仏を相続していると、有難い時と、またいやな時もある。これはどうした事でしよう」と。色々な事で寄付を頼みに見えた時、喜んで出す時もある。然し、受け取ったそのお金に変わりはない。喜び喜び出した千円のお金は千円に通用するのでなく、いやいや出した千円が九百円にしか通用出来なかつたと言う事はない。心に変わりがあつても、お金の値には変わらない。喜び喜び称える念仏も、いやいや称える念仏も、お念仏には変わりない。かえつて、いやいや称える念仏を仏様は、よりよく喜んで下さる。有難い心が有難いので無く、有難くない念仏が有り難いのです。

(お念仏そのものは凡夫の心の内容から独立している。ゆえに凡夫の側の称え心によって、念仏そのものの値打ちは変わらぬ。念仏は無上大般涅槃にいたらしめたもう絶対価値の御名。平生、とかく喜べない心でしか称えられないような私なれば、〈そんなお前なればこそ〉とお念仏の仰せが有難い)

